

巻頭言 科学哲学はこれからどう動くか 一つの予想
国際生命倫理学会の日本開催に寄せて

坂本 百大

21世紀に向けて科学哲学はどのように動くだろうか。今から100年前、前世紀には科学は、したがって、科学哲学(そのころ、この呼び方はなかったが)は大変革を予感させていた。クーンのいわゆるパラダイムの転換が粛々と進行しつつあった時代と云えよう。結果として、相対論、量子力学による物理学大革命が成立し、それを受けて、論理実証主義を中心とする現代科学哲学が誕生した。ここでは科学のイメージの中心は明らかにこの科学革命を成しとげた「物理学」であった。

しかし、今世紀後半に及んで科学のイメージ・チェンジは急激に進行したように思われる。一言にしていえば、要素と原理に対する関心から、複雑と組織性に対する関心への移行と表現できよう。社会学者吉田民人氏はこれを「法則定立型科学」から「プログラム解明型科学」への転回と表現しておられる(『科学哲学』29, p. 64)。至言である。

複雑、組織性の典型が「生命」である。このイメージ・チェンジは結局は「物理科学」から「生命科学」への転換と表現できよう。かつてはそのあまりの複雑さと高度な組織性の故にその分析方法が定まらないまま、「生命」は臆面もなく神の領域に擬せられて来た。しかし今や、「生命」に何の神秘もない。それは完全に人間の領域に落ちついた。この動きの中でその目的論臭のゆえに非科学的として忌避されて来た「進化論」が今かなりの勢いで復活し、先端科学理論として見直されつつある。

ここでいう「目的」、さらに、それに付随する「価値」概念は組織体、とくに、「生命」として本質的な意味を持つ。「生命体」とは「生きる(個体として、また、種として)」ということをも目的として組織された価値的な系である。具体的に言うならば生命とは遺伝と進化という形で目的価値を内蔵した地球上の複雑、巨大自己組織システムである。

「価値からの自由」(Wertfreiheit)という語は科学者の価値無定見を正当化する評語としてしばしば用いられてきた。しかし今や逆に、最も中心的科学の対象そのものが、価値を内蔵して成立する価値組織体であるのである。

この動きは20世紀最後の四半世紀に加速された。1960年代から70年代にかけて、いわゆる技術革新(イノベーション)の時代が現れる。宇宙開発、原子力、人工知能と科学技術が巨大化し、学際的に組織化されたとき、直ちに、TA(テクノロジー・アセスメント)の運動がそれをフォロー・アップし得たということは人類文明の歴史にとって誠に幸運なことであった。科学、そして、科学技術は今やTA(事前評価と訳される)という価値基準から“自由”ではあり得ないのである。このような転換をもたらした大きな動機が原子力爆弾に象徴される科学技術の巨大化に伴う人為的災害にあったことはいうまでもないことであるが、もう一つの大きな動機は、あきらかに、新たに大きく進出した新生命諸科学に内在する諸價

値の混乱とこれら生命諸科学の生命組織体そのものに対する破壊的效果に対するマイナスのTA事前評価によるものであった。とくに、組み換えDNA (Recombinant DNA) という生命技術が、一応のバランスのもとに進化という名の適応を続けて来ている生体、あるいは生態系に壊滅的打撃をあたえる恐れがあるという事前評価があり得たということの学問的效果は大きい。

そして、まさに、この時期に「生命倫理」(bioethics) という新しい学問領域が開始されたのである。生命倫理とは20世紀後半の科学、技術の中心に位置する生命科学、技術に対する「テクノロジー・アセスメント」の運動であると定義することができよう。この意味で「生命倫理」は21世紀をうかがう「科学哲学」の典型例であると私は考える。

ここに一枚のポスターがある。ボストン科学哲学コロキウム of 広告ポスターである。1997年から1998年にかけての講演、企画予定が並んでいる。驚くべきことに、その1/6程度をいわゆる「生命倫理」の課題がしめている。このような課題はそれ以前のプログラム(少なくとも1995~96のポスター)には現れていない。「生命倫理」を科学哲学の一部と考える見方は欧米、少なくともアメリカに意外に急速にひろまっている。フランスにも同様の傾向が見える。

また、近頃評判の高いピッツバーグ大学院の科学史・科学哲学研究コースの今年度のプログラムの中にもBioethicsは一つの有力分野として登場している。

生命倫理に「医者」ばかりがむらがる光景は日

本だけの特殊状況かも知れない。少なくとも「生命倫理」は「医の倫理」ではない。

また、ここで興味あることは、この科学哲学の課題がさらに生態学および、形質、文化人類学の新しい知見と分析を加えてさまざまな環境科学を形成し、これらの環境諸科学の成果が人類の将来を憂える、いわゆる、環境倫理学を誘発し、さらにこの新しい倫理的視角が「基本的人権」「正義論」「人格」論などへの反省的分析を通じて、法哲学、社会哲学の根本問題へと肉薄し、いわゆる「ヒューマニズム的」近代哲学の全体の基盤を揺るがす思想運動として展開されつつあるということである。しかし、これは何も不思議なことではない。そもそも、1972年に始めて生命倫理(bioethics) という新語がR. V. Potterによって活字化されたとき、それは疑うことなく、人類とそれをとりまく環境の将来を憂える生態学的環境倫理そのもの、またそれに関わる社会政策の提案であったのである。

日本に「生命倫理学会」が発足して今年で十年になる。この節目の年にはじめて日本で「国際生命倫理学会」の世界大会が開催される。(学会予告欄参照) 東洋のないしアジア的価値観と西洋的価値観の違和を根底に見据えた、まさに、「価値を背負った」(value laden) な将来的科学哲学の地球規模の生命科学会議となる予定である。日本科学哲学学会会員諸氏のご注目と積極的なご参加を期待したい。そして同時に、これを好機として「生命倫理」という課題を早急に科学哲学の資産目録の中に組み入れていきたいと思う。



会務報告

(1997.4.1 ~ 1998.3.31)

1997年5月10日 編集委員会

議題 1. 『科学哲学』30巻公募論文審査者の決定

1997年6月14日 理事会

議題 1. 『科学哲学』の年間2回発行について
2. 名誉会員について
3. 学会費長期滞納者の扱いについて
4. 委員会出席者の旅費規程について
5. ホームページの作成と一般公開について
6. 国際交流について

1997年6月14日 大会実行委員会

議題 1. 第30回大会について

1997年6月14日 編集委員会

議題 1. 『科学哲学』30巻掲載論文の決定

1997年9月13日 理事会

議題 1. 第9期会長選出について

1997年9月13日 大会実行委員会

議題 1. 第30回大会プログラムの決定

1997年11月15日
理事会・評議員会・大会実行委員会
議題 1. 第31回大会について

1997年11月16日
理事会・編集委員会・大会実行委員会
議題 1. 『科学哲学』31巻の編集について
2. 選挙結果について
3. ホームページのリンク先について

1997年11月29日 理事会
議題 1. 1998年度の活動方針について
2. ニュースレターについて
3. 名譽会員について
4. 第31回大会について

1997年11月29日 編集委員会
議題 1. 今後の編集方針について
2. 『科学哲学』31巻2号の特集テーマについて

1998年2月28日 大会実行委員会
議題 1. 第31回大会について

1998年2月28日 編集委員会
議題 1. 『科学哲学』31巻2号の書評について

1998年2月28日 理事会
議題 1. 学会費長期滞納者の扱いについて
2. 国際生命倫理学会第4回世界大会の後援について
3. 名譽会員について

国際記号学会参加報告(2件)

藤本隆志

(1) 第6回国際記号学会

1997年7月13日から18日までの6日間、メキシコ合衆国はグアダハラ市郊外のホテル・タパティーオなる瀟洒なりゾート・ホテルで、全世界40余国からの講演者/研究報告者だけでも630名を超える国際会議が開催された。大会の全体テーマは「自然と文化を架橋する記号論(Semiotics Bridging Nature & Culture)」である。議論されたトピックも50以上に上ったが、そのうち参加者の多かったセッションには Biosemiotics, Corporeal space, Poetics, Artistic space, Discourse analysis, Literature, Mythical time, Visual space, Models, Sociosemiotics, Ethnic culture などがあって、とりわけ「生命記号論」は斯界の重鎮トマス・シビオク教授がワークショップを司会し、特別紹介講演を行うなど、ここ暫くは注目すべき新領域になりそうである。ただし、日本人参加者はこの国際会議組織委員として坂本百大会長、科学委員として藤本隆志会員、それに“Le corps humaine: charnière entre nature et culture”なる基調講演を行って会場を唸らせた日本記号学会の川田順造氏の計3名だけであって、我が国における若い世代の出遅れや渡航費助成の不備など、国際交流上の問題を感じさせられた。

(2) 第2回東アジア記号学セミナー

1997年10月19日から23日まで中国上海市の華東師範大学で「第二屆東亞符號學國際會議」が開催された。第1回中国武漢での会議(1992年)を享け、日本大学総合科学研究所と中国社会科学院の主催の下に、中国側の李先煜/沈劍英両教授と我が国の坂本百大教授が窓口になって組織・運営を行った。「東アジア記号学の可能性」を主題とし、東アジア漢字文化圏に特有の記号論がどのようにして可能になるかを模索するというのが、その主旨である。中国側から数十名、日本から20名余、国際記号学会からも元会長のJerzy Pelc教授、事務局長のJeff Bernard氏など数名のほか、韓国、インド、インドネシア、ブラジル、ハンガリーなどからも参加者があって、外国人は全員が講演・研究発表・司会など何らかの発言の機会をえた。一衣帯水の間柄のせいも、セミナー終了後に行われた1泊2日の杭州旅行を含め、終始和気藹々の雰囲気の中で国際親善の実があげられたように思う(色々面白い食い違いもあったけれど)。なお、この機会に東アジアという限定を外した「アジア記号学会(Asian Association for Semiotic Studies)」の創設が決議され、坂本百大氏が初代会長に選出された。

1年間ニュージーランドで研究生生活を送る機会を得たので、かの地の哲学事情を、筆者の知りえた範囲で会員諸氏にお知らせしようと思います。何かのお役に立てば幸いです。といっても、筆者は主としてオークランド大学に籍を置いていたもので、実際には同大学の哲学科の事情と、昨年(の)7月5日～13日に同大学で開かれた Philfest '97 に参加して得たニュージーランドとオーストラリアの哲学事情に限られます。

オークランド大学哲学科には次のような人々がいます。John Bishop(いわゆる行為の自由と決定論との関係などに関心を抱いている。同学科の主任教授)、Robert Nola(科学哲学、とくに社会科学の哲学に関心がある。他の人が不親切だったというのではないが、ニュージーランド滞在中、他の誰にもまして筆者に非常に親切にしてくれた)、Frederic Kroon(論理学や数学の哲学、意味論などに関心がある)、Stephen Davies(芸術、特に音楽の哲学が専門であるが、社会哲学などにも深い関心を寄せている)、Denis Robinson(心の哲学や言語哲学が専門であるが、幅広い関心をもっている)、Roderic Girle(論理学、特に様相論理が専門)、Chris Martin(中世哲学、特にアペラールに造詣が深い)、Julian Young(ハイデガーの専門家)、David-Braddon Mitchell(心の哲学や言語哲学が専門であり、いかにも頭が切れるという感じの人)、Tim Dare(社会哲学や法哲学に関心がある)、Christine Swanton(倫理学が専門で、virtue ethicsを研究している)、Jan Crosthwaite(女性学の専門家)、Gillian Brock(倫理学、とりわけ応用倫理学に関心あり)、Robert Wicks(フランス哲学、とくにサルトルの専門家)、Vanya Kovach(倫理学を特に authenticityの問題との関連で研究している)、Justine Kingsbury(Millikan風のBiosemanticsを研究している)。

学期中は毎週金曜日にセミナーをやっています。話し手は、学科のスタッフであったり、ニュージーランドの他の大学から来た人であったり、オーストラリアの大学から来た人であったりです。たまに院生が、準備中の博士論文の一部を報告することもあります。学生や院生はどんなテーマに関心をもっているのかと尋ねたところ、強いて言えば倫理学と心の哲学か、というような

返事が返ってきました。これだけの人数のスタッフがいてその中に古代ギリシャ哲学の専門家がないのは日本では考えられないことですが、そのことはこの哲学科の人々も気にしているようで、もし人が採れるならそういう人を探りたいとは言っていました。(ちなみに、冬の学期では Nola 氏が学部学生に古代哲学を教えることになっていて、何をやるのかと聞いたら、プラトンの易しい対話篇をテキストに使うつもりだ、と言っていました。)

1997年7月5日～13日に Philfest '97 がオークランド大学で開かれました。これは、いつもは別々の場所と日程で別々に開かれている次の4つの学会の年会を一緒に開催したものです。すなわち、Women in Philosophy、Australasian Association for Logic、Australasian Association for Philosophy、Australasian Association for History, Philosophy and Social Studies of Science。発表は非常に盛沢山でとてもすべてを紹介できませんし、筆者もそのごく一部に参加できたので、印象に残っていることだけ報告しようと思います。Kuhnの死ということもあってか、Kuhnをどう評価するかというような内容の特別報告が二つありました。1つは Andrew Pyle (Univ. of Bristol) の 'Thomas Kuhn and the Revolution in Chemistry' で、もう1つは John Worrall (London School of Economics) の 'How Revolutionary was the "Kuhnian Revolution"?' というものです。進化生物学に関するシンポジウムが開かれ、Kim Sterelny が提題者の一人になっていました。彼は最近はこの問題に関心があるようです。一般の研究発表では Max Cresswell がアリストテレス解釈の話をしました。(いわゆる海戦問題についての話です。) 彼が古典解釈のようなことをやるとは予想もしていなかったので少し驚きましたが、ある人に聞いたところでは、彼はもともとアリストテレス解釈には深い関心があったのだそうです。David Armstrong がまだ現役で研究発表しているのには驚きました。いくつかの研究発表を聞いて感じたことは、Alston や Horwich の真理論や、Bayesianism の科学方法論への応用(帰納主義の復活?)の話が結構話題になっていることです。筆者の不勉強のせいかもしれませんが、

我が国ではあまり論じられていないように思うので、少し気になるところです。アジアの哲学と比較哲学のセッションがあり、Rosemary Mercerの日本の江戸時代の思想についての話、Henry Chanの中国における近代西洋思想の受容の話は興味深かった。Henry Chanと雑談したときに彼が、今の中国は明治維新の頃の日本の状況と大差ない、と言っていたのが印象的であった。

隣の国ということと、Australasian ということとで、当然オーストラリアから多くの人々が来ていたが、David Lewis がわざわざアメリカからやってきているのには少し驚いた。彼はこちらの学会の雑誌 (Australasian Journal of Philosophy) にもしばしば寄稿しており、こちらの学会の年会には毎回来ているようで、オーストラリアやニュージーランドが好きなのかもしれない。



会計報告

【1996 年度決算】

収入：前年度繰越金	581,858
学会費納入	1,866,000
大会参加費	85,000
学会誌売上	40,364
預金利子	149
合計	2,573,371
支出：学会誌第 29 巻制作費	590,960
名簿制作費	182,500
ニューズレター制作費	83,400
第 29 回大会運営費	213,970
通信費	376,780
印刷費	98,000
会合費	0
消耗品費	16,191
手数料報酬費	40,300
雑誌バックナンバー購入費	91,930
小計	1,694,031
次年度繰越金	879,340
合計	2,573,371

【1997 年度予算】

収入：前年度繰越金	879,340
学会費納入	1,800,000
大会参加費	100,000
学会誌売上	40,000
預金利子	400
合計	2,819,740
支出：学会誌第 30 巻制作費	400,000
学会誌第 31 巻 1 号制作費	400,000
『30 年の歩み』製作費	200,000
ニューズレター制作費	100,000
第 30 回大会運営費	250,000
通信費	400,000
印刷費	150,000
会合費	200,000
消耗品費	30,000
手数料報酬費	100,000
予備費	589,740
合計	2,819,740



寄贈図書紹介

1997 年 4 月 1 日 ~ 1998 年 3 月 31 日

鹿兒島達男著

『「地球論」に基づく「新自然法」の提唱』

海鳥社

藤本隆志・伊藤邦武著 『分析哲学の現在』

世界思想社

永井義憲著 『大宇宙観の樹立』

鷹友印刷

菅原博文 『抽象について』

『紀要』第 173 号 (中央大学文学部)

『大学教育学会誌』

第 19 巻第 2 号 (1997 年 11 月) 大学教育学会



学会・研究会予告

日本科学哲学会第31回大会

【期日】 1998年11月21・22日

【場所】 鹿児島大学

日本哲学会第57回大会

【期日】 1998年5月23・24日

【場所】 金沢大学

科学基礎論学会講演会

【期日】 1998年6月6・7日

【場所】 立正大学

日本記号学会1998年度学術大会

【期日】 1998年5月16日(土) 17日(日)

【場所】 文教大学国際学部

(〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100

Tel 0467-53-2111)

【詳細】

<http://www.tara.tsukuba.ac.jp/semiotic/taikai-program.html> をご覧ください。

日本認知科学会第15回大会

【期日】 1998年6月25～27日

【場所】 名古屋大学 シンポジオン・ホール

(〒464-8601 名古屋市千種区不老町)

【詳細】

WWW の、<http://www.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/CFPs/jcss98.html> をご覧ください。

日本生命倫理学会第10回年次大会

【期日】 1998年10月17・18日

【場所】 兵庫県立看護大学

【詳細】

事務局(〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40 日本大学文理学部哲学研究室内 TEL. 3329-3220) にお問い合わせ下さい

International Congress on Discovery and Creativity

Dates: 1998.5.14-16

Location: University of Ghent (Belgium)

Contact: Joke Meheus, Universiteit Gent, Philosophy, Blandijnberg 2, 9000 Gent, Belgium

For detail: Joke.Meheus@rug.ac.be

Association for the Advancement of Philosophy and Psychiatry

Dates: 1998.5.30-31

Location: Toronto

Theme: Gender Perspectives In and On Psychiatric Theory and Practice

Contact: Linda Muncy, Psychiatry, UT Southwestern Medical Ctr., 5323 Harry Hines Blvd., Dallas, TX 75345-9070

For detail: lmuncy@mednet.swmed.edu

ISSA International Conference on Argumentation

Dates: 1998.6.16-19

Location: Amsterdam

Theme: Argumentation Theory: Multi-Discipline Perspectives and Approaches

Contact: F.H. van Eemeren, U. of Amsterdam, Discourse & Argumentation Studies,

Spuistraat 134, 1012 VB Amsterdam, The Netherlands

For detail: issa@let.uva.nl

Third International Conference on Information-Theoretic Approaches to Logic, Language, and Computation

Dates: 1998.6.16-19

Location: Hsi-tou, Taiwan

Contact: P.Blackburn, Computerlinguistik, U. of Saarland, D-66041

Saarbrücken, Germany

For detail: ITALLC98@coli.uni-sb.de

Twentieth World Congress of Philosophy (WCP)

Dates: 1998.8.10-16

Location: Boston

Theme: Paideia: Philosophy in the Education of Humanity

Contact: American Organizing Committee, Boston U., 745 Commonwealth Ave., Boston, MA 02215

For detail: PAIDEIA@bu.edu

Conference on Computing and Philosophy (with WCP)

Dates: 1998.8.10 - 16
Contact: Robert Cavalier, Ctr. for the
Advancement of Applied Ethics,
Carnegie Mellon U., Pittsburgh, PA 15213
For detail: rc2z@andrew.cmu.edu

21st International Wittgenstein Symposium

Dates: 1998.8.16-22
Location: Kirchberg am Wechsel
Theme: Applied Ethics
Contact: The Austrian Wittgenstein Society,
Market 63, A-2880 Kirchberg am Wechsel,
Austria

Perspectives on Consciousness: The Nature of the Conscious Mind and its Relationship with the Physical Universe

Dates: 1998.9.18-20
Location: University of Arkansas
Contact: Tom Senior, Philosophy, U. of
Arkansas, Fayetteville, AR 72703
For detail: senior@comp.uark.edu

Fourth World Congress of Bioethics

Dates: 1998.11.4-7
Location: Tokyo
Contact: Dept. Philosophy, Nihon University,
3-25-40 Sakurajosui, Setagaya-ku, Tokyo
156-8550, Japan
For detail: kasamatu@chs.nihon-u.ac.jp

Association for Symbolic Logic Annual Meeting

Dates: 1999.3.20-23
Location: San Diego
Contact: ASL Business Office, Mathematics,
U. of Illinois, Urbana, IL 61801
For detail: ask@math.uiuc.edu

11th International Congress of Logic, Methodology and Philosophy of Science

Location: Cracow
Dates: 1999.8.20-26
Contact: Organizing Committee LMPS 99,
Institute of Philosophy, Jagiellonian
Univ., ul. Grodzka 52, 31-044 Cracow, Poland
For detail: lmps99@jetta.if.uj.edu.pl



『科学哲学』バックナンバー在庫一覧

タイトル	定 価		
3 (1970年)	1,500円	18 (1985年) 志向性について	1,700円
4 (1971年)	1,200円	19 (1986年) 言語理解	1,700円
5 (1972年)	1,000円	20 (1987年) 意識・機械・自然	1,700円
6 (1973年)	非売品	21 (1988年) 私 の同一性	1,700円
7 (1974年) 記号・情報・論理	1,300円	22 (1989年) 科学と反 - 实在論	1,800円
8 (1975年) 行為の理論	1,300円	23 (1990年) 科学哲学の未来を問う	1,800円
9 (1976年) 様相論理学	1,300円	24 (1991年) 異文化理解の基礎	1,800円
10 (1977年) 心身問題と道徳	1,300円	25 (1992年) 自然化された認識論	2,000円
11 (1978年) 解釈とモデル	1,500円	26 (1993年) 科学的説明	2,000円
12 (1979年) 言語と非言語	1,500円	27 (1994年) 量子力学と物理的实在	2,000円
13 (1980年) 社会科学と哲学の間	1,500円	28 (1995年) カオスをめぐって	1,200円
14 (1981年) 論理とは何か	1,600円	29 (1996年)	1,800円
15 (1982年) 科学哲学の展望	1,600円	特集1 デュエムの科学哲学の現代的意義	
16 (1983年) 認知科学の哲学	1,600円	特集2 サイバネティクス	
17 (1984年) 合理性とは何か	1,700円	30 (1997年) 近代における科学と哲学	1,500円



事務局からのお知らせ

1. 日本科学哲学会第30回大会の総会で、会則第4条を改正し、新たに名誉会員の規程を設けることが議決されました。改正された会則(『科学哲学』31巻1号の134～135ページに掲載されていますのでご覧ください)は、1998年4月1日より施行されましたので、名誉会員への資格変更を希望される方は、事務局まで御連絡下さい(名誉会員は学会費が免除されますので、今年度より資格変更を希望される方は今年度分の学会費を納入される前に御連絡下さい)。
2. 1998年度分の学会費をお納め下さいますようお願い申し上げます。貴台の(今年度分を含めた)学会費未納分合計金額が、封筒表面のラベル右下に記載されていますので、同封の振込用紙にてお納め下さいますようお願い申し上げます。なお、「-」表示の方は完納となっております。



編集後記

ニューズレター第7号をお届けします。学会誌『科学哲学』が年2回発行になったため、ニューズレターを独立で出す必要はなくなったと思っていたのですが、やはり、しばらく続くことになったようです(?!)。雑誌の発行体制が変わったことから、ニューズレターのあり方も変わるべきではないかと思うのですが、私の怠慢でこれまでと同じような形式となりました。ぜひ、広く会員のみなさまから、ニューズレターのあり方についてご意見を頂きたいと思っています。

それはさておき、今回も会員諸氏のおかげで面白い記事を頂きました。また、インターネットは、一方でごみだめのようなところもありますが、最新のニュースを入手するにはとても便利なところで、ここに載せました海外の学会開催の

ニュースもインターネットから拾ってきたものです。したがって、このニューズレターが届く頃にはもっと最新の情報が流れているだろうと思います。ただ、国内でも、科学哲学に関連するさまざまな催しが開かれていると思うのですが、そちらの方のニュースがどうしても手薄になってしまいます。そうしたニュースをお持ちの方はぜひ科学哲学会のメーリングリストで流すなり、事務局までご連絡するなりして頂ければ幸いです。

いつものことですが、このニューズレターはまったく事務局の努力、とりわけ古田智久氏の献身的な努力でできあがったものです。名ばかりの責任者として、最後にひとことぜひ付け加えなければならぬことでした。

(飯田 隆)

日本科学哲学会ニューズレター No. 7 1998年5月15日

編集兼発行 日本科学哲学会

事務局 〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40 日本大学文理学部哲学研究室内

Tel. 03-3329-1151 (内線4100)

Fax. 03-3329-9217 【宛名「日本科学哲学会」明記のこと】

印刷 文成印刷 〒168-0062 東京都杉並区方南 1-4-1